

吉野川をテーマにしたダンス公演と絵本制作及公演のために募集した吉野川の短歌を引用した

ときめきダンスカンパニー四国（四国大学）代表 田村 典子

はじめに

徳島県に流れる大河、四国三郎吉野川の河口沿いにある四国大学は、吉野川の日々変化する川の表情を眺めながら教育・研究ができるといった、豊かな自然環境に恵まれた位置にある。この大学を母体に、大学の教職員や地域の住民たちで構成している団体「ときめきダンスカンパニー四国」は1991年に結成し、現在3歳の子どもから53歳の大人までを含め、約70名が自分達の生活と結びついた社会的な問題や地域文化等について考え、その思いをダンス創作したり、様々な表現媒体を駆使して幅広い創作活動を実践している。そんな中で、四季折々に変化する吉野川の表情は、私たちの心を潤し、豊かな情緒を育んでくれる。このような川の美しさや神秘性は、人間の自然観や思想の形成にずいぶん影響していると考えている。また、私たちは、この川の流れによって感性を刺激され、創作意欲に拍車がかかり、様々な活動を展開するエネルギーとなっているのも事実である。吉野川のようなスケールの大きい川では、それとの関わりなくしては、徳島という地域の生活や歴史・文化は語ることができない。精神的・文化的な側面からのアプローチで川と関わりながら、その素晴らしさについて、県内外の多くの人々に吉野川への興味関心を広げ、水の大切さを感じてもらいたいと活動を進めている。

創作ダンス公演

1993年に吉野川の源流を旅し、その神秘的な水・川に心が動かされた。道なき道を歩み、沢を登ること2時間程で源流点に到着する。源流は美しく、原生林が生い茂り、自然の時空の重さを実感し、人間生活の時空との違いを思い知った。ここから流れ出る一雫の水にドラマを感じ



写真1 源流 写真家 田村善昭氏撮影



写真2 源流で踊る

びそれらを素材にしたVTRの制作と 「短歌で綴る吉野川の旅」の本制作

じ、私たちに恵みと潤いを与えながら194キロを流れる母なる吉野川に愛着を感じた。この感動を伝えたいと、吉野川から受けたイメージをダンスで表現する「吉野川讃歌」を公演した。原生林に隠され、未だ何ものにも染まらぬ水を表現した「聖」。そして穏やかな恵み深い水によって、藍を育て、米を育み阿波の国を支えたことを表現した「恵」。水に親しみ、戯れる若人たちが青春を謳歌する「榮」。194キロを流れ、あらゆるものを受容し、激しく、寛容に、様々な表情を持つ母として、またパートナーとしての吉野川をとらえた「母」。公演は、4部構成にし、吉野川という太古からの水を私たちが守り伝え、未来への流れを絶やさぬようにしようとメッセージした。

その4年後の1997年、私たちは一つの詩に出合った。その詩から一冊の詩集にたどりついた。『詩集「吉野川」』というタイトルのその詩集は、吉野川の流域に住んでいる、内藤正義氏によって書かれたものであった。詩文には、吉野川の美しい描写など一つもなく、全て暗くて怖かった。私たちにとっては、非常に衝撃的な出来事だった。何故あの美しい川が、ここまで辛く悲しく描かれなければならなかったのか、という疑問が渦を巻いた。作者に会い、吉野川の過去を紐解くことになったが、吉野川によって苦しめられてきた人、辛い苛酷な暮らしを強いられていた人々に思いを馳せると胸が詰まる思いでいっぱいだった。このように、一冊の吉野川の詩集から、現在の吉野川にない川のイメージが浮きぼりにされ、四国三郎という威名を持つ川の洪水の歴史にたどりつくことになった。こうして吉野川の新たな一面をダンスで語り、多くの人にメッセージしたいと企画したのが1997年8月の公演「吉野川一川と生きる阿波の人」であ



写真3 吉野川公演パンフ



写真4 創作ダンス公演1

った。現在では想像もつかない川の歴史を、ほとんどの県民は知らない。先人たちが築いてき

吉野川をテーマにしたダンス公演と絵本制作及びそれらを素材にしたVTRの制作と公演のために募集した吉野川の短歌を引用した「短歌で綴る吉野川の旅」の本制作
ときめきダンスカンパニー四国(四国大学) 代表 田村 典子



写真5 創作ダンス公演2



写真6 創作絵本とVTRの制作

た洪水との闘いの歴史をぜひとも創作ダンスで表現したいと思い、文献で研究し、郷土史家に話を聞いた。公演の第1部では、歴史的な部分を中心に、暴れ川の吉野川と生活してきた人々を、またその川によって支えられた阿波の国を表現した。第2部では現在の吉野川、人々に豊かな自然環境と潤いを与えている川を表現した。鑑賞者に吉野川の歴史を学んでもらいその風土を感じながら、地域の川との共生を考えようとメッセージする内容で公演を開催した。

芸術的にアプローチするダンス公演は、メッセージするダンサーの思いがそのまま会場の雰囲気醸し出し、鑑賞者の心情的部分、感性を

揺さぶり感動的に伝えることができると考えている。公演後の鑑賞者のアンケートからは、川の見方や感じ方が変化し、川を大切にする気持ちや、人との共生関係を意識してもらえる結果になったことがわかった。

創作絵本の制作

「吉野川一川と生きる阿波の人」の公演の感動と反響が引き金になり、翌年の1998年、もっと多くの人に継続的に吉野川の歴史と文化を語りたいと思い企画したのが、絵本『すべては水からはじまった 感じたいな……吉野川』の制作であった。絵は、イラストレーターの高石氏にお願いした。水や吉野川のイメージがますます展開していくようにとの思いで、絵は感覚像的に、文字は擬音語や擬態語を多くし、文字数は少なめにしてリズムカルな流れを考えた。また、吉野川の歴史的な内容の説明も簡単に加えた。

この絵本は、大人と子どもが一緒に見ながら吉野川に思いを馳せ、イメージを膨らませながら読んでもらい、川を感じてもらう内容に仕上げた。その使用方法を工夫することで、感性の育成にも役立てることができる。またそれは、自然に対する見方や考え方を科学的な分野からだけでなく、文化芸術的な方面から考えることにもつながる。

制作後は、マスメディアを通じた広報活動を展開し、県下の保育所、児童館、幼稚園、小学校には勿論のこと、保護者や他団体に対しても配布した。また、参加者が所属している保育所や幼稚園・小学校において、制作した絵本を利用して、子どもたちに川を感受する心を養い、川に対する感性教育を援助し理解を深めた。その他、大学の表現授業でも絵本の活用方法を指導しながら、吉野川をテーマにした授業を展開

した。

一般募集した短歌を引用したダンス公演

これまで吉野川をテーマにしたダンス公演は、私たちの思いを主体に作品を創作してきた。これをもっと多くの人と共に語れないだろうかと考え、短歌募集を発想した。徳島新聞で一般県民に、吉野川に思いを寄せた短歌募集を広報してもらった。その記事がきっかけで、東京新聞にも取り上げられた。その結果、県内外から問い合わせが相次ぎ、吉野川という川の存在価値を新たにした。寄せられた156首の短歌のうち20首を厳選し、ダンスを振りつけた。また、舞台装置5m四方のパネル1枚とその半分のもの3枚に高石氏がイメージ画を描き、舞台後方に吊り下げ、書家の辻氏が、横1m縦10mの短冊20枚に書で短歌のイメージにあった技法で表現し、舞台のステージの空間に吊り下げた。ダンス作品によってそれらを変化させながら舞台の効果として使用し、音と身体の動き、絵画、書で語る「吉野川絵巻」を1999年8月に発表した。大ステージが絵のように展開され、2時間の公演はまさしく吉野川を語る絵巻のようであり、川との共生を考えさせられる公演であったという評をいただいた。

VTR制作

今までに、吉野川を表現した媒体として、ダンス（身体・音楽・舞台装置・空間・照明）、創作絵本、吉野川源流から河口までの映像等がある。今後も私たちが吉野川の興味関心を広げていく活動を推進するに当たり、ダンスという動きのある活動を通じて理解してもらおうと、1999年に吉野川の絵本をベースに、ダンスと映像、ナレーションで仕上げるVTRの制作に乗り

出した。子どもから大人までが、感性を働かせながら鑑賞できる、収録時間30分のVTRを1,500本制作した。

誰もが親しみやすいように、吉野川の源流の映像と、子どもたちの会話から入り、幼い子の朗読する吉野川の歴史から始まる絵本の世界と、それを表現したダンスの融合を試みたVTRである。主な内容は、吉野川をテーマにしたダンス、吉野川の歴史を紐解き制作した絵本、吉野川の源流から河口までの映像、ナレーション、絵本の朗読で構成し、吉野川を表現したダンスを随時に取り込み、動きのある映像によって楽しみながら感じ取れるようにした。そして吉野川の



写真7 幼稚園絵本活用



写真8 小学校絵本活用

吉野川をテーマにしたダンス公演と絵本制作及びそれらを素材にしたVTRの制作と公演のために募集した吉野川の短歌を引用した「短歌で綴る吉野川の旅」の本制作
ときめきダンスカンパニー四国（四国大学）代表 田村 典子

美しさ、生活の水、自然への畏怖・畏敬を織り込んで、鑑賞者が自然との共生を考えられるようにした。

VTRの完成後は、各福祉施設等にVTRを持参して訪問し、吉野川の推進活動に乗り出した。吉野川の源流から編集されているVTRの映像は、吉野川の優しさや恵み、怖さの映像の上にダンスが効果的に加わり、そのイメージがより心情的なものを含んで感覚的に伝わり、訪問先の方々の吉野川に対する印象を強くしたようであった。それは、吉野川の映像だけを単純に見るよりも、音楽や動き、ナレーション、朗読等、あらゆる表現媒体によって、各自の思いを膨らませて感じることができる。そのことによって見る者に川の見方や考え方に何らかの影響を与えさせるものであったからであると思われる。また保育所、小学校の教員が多いメンバーによって、VTRをそれぞれの職場の子どもたちに鑑賞してもらう場が持てた。特に、総合的な学習を推進していこうとしている学校現場においては、吉野川を絵本やダンスで表現したり、映像や音楽等様々な角度で構成されたこのVTRは、活動の参考になり、その内容は地域教材や環境教育に活用できるものになった。

短歌集の制作

さらに私たちは、1999年8月に、応募してくださった短歌すべてを取り上げ、吉野川の源流から河口までの流れをイラスト等を加えて語ろうと現在制作中である。応募してくださった方々は、実際に五感で吉野川を感じ、その思いを三十一文字で表現している。吉野川と徳島県民とのかかわりが、この短歌を通して見えてくるのである。日々の暮らしの中で、吉野川をどのように感じ取っているかは、この短歌を詠む



写真9 大学表現授業1



写真10 大学表現授業2



写真11 総合化教育の絵本活用



写真12 短歌募集



写真13 吉野川絵巻練習風景



写真14 吉野川絵巻公演1



写真15 吉野川絵巻公演2



写真16 福祉施設VTR活用1

吉野川をテーマにしたダンス公演と絵本制作及びそれらを素材にしたVTRの制作と公演のために募集した吉野川の短歌を引用した「短歌で綴る吉野川の旅」の本制作
ときめきダンスカンパニー四国（四国大学）代表 田村 典子



写真17 福祉施設VTR活用1



写真18 短歌応募葉書

ことで理解できる。徳島の大河、吉野川は県民にとって癒しである。自然への畏怖や畏敬の念を持ちながら、その自然と私たち人間が、21世紀の未来を調和しながら生き続けるための心情的な部分への働きかけを実現できるような短歌集を1,000部制作し2000年8月に発行予定である。

おわりに

私が初めて吉野川の源流を訪れた5月の新緑の森は、生命の息吹があちらこちらに感じられ、限りなく美しかった。何百年、何千年と生きている森の木々は、その下に水をいっぱいためていた。枯れ葉や土や岩などの様々な成分を溶け

込ませながら、低い方へ流れて川となり海へと続く。苔むした老木が横たわり、その幹の間に小さな木の芽を見つけ、循環する自然の摂理を感じた。4時間もの源流の旅が終わろうとしている頃、小雨が降ってきた。いちだんと森が生き生きとしてきたのを感じたのは私だけだったのだろうか。不思議なことに、心が解放され口ずさむ歌が自然に生まれてきた。私の身体は、自然の偉大さ、自然の持つ壮大なエネルギーを感受した。この素晴らしい感動を私は生涯忘れないだろう。

私たちは創作活動の中で、水や川、自然と人間の共生を考え、可能な範囲でそれをメッセージしてきた。悠々たるスケールの自然に対して、遙かにはかない人間の営み。それらが共に共存していける文化を形成することが、これからの私たちの課題である。現在、ますます難しくなる自然との共存の中で、私たちが忘れてはならないのは、自然への神秘性ではないだろうかと思う。

確かに20世紀は人間中心の価値観が異常なまでに突出し、科学的に自然を解き、技術を駆使して自然を支配しようとしてきた。そのために自然はますます私たちの生活から遠ざかり、水が、森や湖、大地や海、そして動物や植物等、大自然が地球という一つの生命体を形成していることを意識するゆとりがなかった。今、私たちは意識しなければ自然の重要さを理解できないようになってしまった。人間たちは、生存していくために、変化を求めつづけるが、自然は変化を好まず循環の世界を巡っている。自然のメカニズムを科学によって解いていこうと努力するのは大切であるが、自然はそれだけでは解ききれない世界があることを、私たちは忘れてはいけないと思う。そして私たちが、科学によ

っては解ききれない自然とつき合っていこうとするならば、自然の神秘性を大切にしなければならない。近代的な思考は、私たちを不可思議なものとのつき合っていく能力を削除してしまった。しかし、現在の自然に対する関心の高まりは、自然をこれ以上こわすことなく守っていこうという立場に止まらず、現代文明そのものを見直そうとする意識とも結ばれている。

人間の感性を大切にして、表現する創作活動を通して、私たちは、自然に対して神秘哲学的な傾向で接する重要性を忘れてはいけないと考えている。人間の理解をこえたものに対して驚きながら、素直に受け入れ、見守り、ゆったりとつき合っていく豊かさを持ちつづけながら、自然との共生をテーマに今後も活動を継続していきたい。
